

2024年6月4日

学校法人三幸学園
東京未来大学福祉保育専門学校
校長 中村 光一 殿

学校関係者評価委員会
委員長 松縄 和彦

学校関係者評価委員会実施報告

2023年度学校関係者評価について、下記のとおり評価結果を報告します。

記

1 学校関係者評価委員

- ① 松縄 和彦 (社会福祉法人三幸福社会 理事長)
- ② 大北 有慶 (足立区福祉まるごと相談課 課長)
- ③ 平井 宏子 (SANKO 日本語学校 部門長代理)
- ④ 堤 隆太 (飛鳥未来高等学校足立キャンパス 教頭・キャンパス長) 〈欠席〉
- ⑤ 姉崎 隼 (ぼけっとランド綾瀬 園長)
- ⑥ 竹田 美鈴 (幼保連携型認定こども園葛飾みどり 園長)
- ⑦ 櫻田 凱斗 (東京未来大学福祉保育専門学校 2023年度卒業生)
- ⑧ 佐々木 愛莉 (東京未来大学福祉保育専門学校 2023年度卒業生)

2 学校関係者評価委員会の開催状況

2024年5月28日 (会場 東京未来大学福祉保育専門学校 プレイルーム)

3 学校関係者委員会報告

以下「自己評価・学校関係者評価報告書」に学校関係者評価委員会コメントとして記載

以上

2023年度 学校法人 三幸学園 東京未来大学福祉保育専門学校 自己評価ならびに学校関係者評価報告書

自己評価報告責任者：副校長 小平 香織

学校関係者評価報告責任者：学校関係者評価委員会委員長 松縄 和彦

1. 学校の教育目標

学園のビジョン「人を活かし、日本をそして世界を明るく元気にする」、ミッション「人を活かし、困難を希望に変える」のもと、福祉保育分野の学校として「福祉・保育現場に貢献することで、日本を明るく元気にする」というビジョンを掲げている。

また「技能と心の調和」を教育理念とし「素直な心、感謝の気持ち、高い意欲を持ち続け、自ら考え、自ら行動することで、社会に貢献する人材」、福祉保育分野として「豊かな人間性と確かな技術で、関わる人に、幸せや希望を提供できる人」を人物像とし、専門学校として社会・業界に求められる人材の育成を進めている。

2. 前年度に定めた重点的に取り組むことが必要な目標や計画

① 前年度重点施策振り返り

●主体的に学べる仕組み作り＝行事、産学連携の活用

2023年度卒業生アンケートでは、「学校で主体性(自ら考え、自ら行動する力)を身につけた」という項目において保育科は 3.25(こども分野全国平均 3.13)という、三幸学園こども分野において最も高い結果となった。介護福祉科は 3.19(医療分野全国平均 3.01)で、こちらは三幸学園医療分野において二番目に高い数値となり、多くの生徒が主体性を身につけたことを実感しているアンケート結果となった。

姉妹校合同行事である三幸フェスティバルを開催するにあたり、各クラスの委員やリーダーが目標を設定し、その設定した目標のためにクラスを団結させ、練習を指導するなど、生徒が中心に立って運営をすることで生徒全体が行事に対して主体的に臨むことが出来た。行事満足度も非常に高く、次年度もリーダーをやりたいとの声が上がったり、三幸フェスティバル以降、雰囲気好転するクラスがあったりと、次年度につながる教育効果をもたらすことが出来た。

介護発表会は発表内容を選択制にすることで学生が主体的に取り組める仕掛けを作った。実行委員の人数を増やし生徒主体の準備・運営を目指したが、教員のサポートが多く必要という点で課題が残る。保育発表会は教員が前に出て仕切るのではなく、準備から運営全てにおいて生徒が主となり進めていく方法をとっており、生徒の主体性を発揮できる行事の場として活用している。

●生徒の長所を見つけ・伸ばす仕組み作り

＝生徒全員にスポットライトを当て長所を見つけ伸ばしていく(授業・行事)

担任教員中心に長所を見つけ、声掛けするだけでなく、土日のオープンキャンパスをサポートするキャスト活動や、保育科の地域連携みらいキッズ、近隣保育園との授業連携、介護福祉科の産学連携チャレンジド・

ヨガ、その他行事を通しそれぞれが活躍する場を提供出来た。

卒業生アンケート内の、「本校で成長することができましたか」の問いに対し下記の結果となっており、卒業生のほとんどが成長実感を得て卒業していることが分かるが、保育科に比べ介護福祉科の成長実感が少ないため、次年度は介護福祉科に対する施策が必要。

保育科	出来た	81.4%(81.6%)	どちらかと言えば出来た	18.6%(17.1%)	計	100%(98.7%)
介護福祉科	出来た	50.0%(63.3%)	どちらかと言えば出来た	46.0%(34.7%)	計	96.0%(98.0%)
全校平均	出来た	62.4%(62.2%)	どちらかと言えば出来た	34.2%(34.3%)	計	96.6%(96.5%)

※()内は 2022 年度数値

●教職員の一体化・連携＝全体会議/学科会の充実、授業後には必ず声掛けし情報共有を図る

担任から教科担当へ声掛けし情報共有を図る意識は醸成出来たが、個人差があることが課題。年に3回の全体会議の際に実施する学科会では、カリキュラムマップを共有することにより、教科の関係性を明示することで教科間連携を取りやすい環境にした。保育科では各教科の連携に力を入れて、継続して開催することで、各教科の連携を促進することが出来た。介護福祉科の学科会では各領域の目標設定、各教科の進行と到達目標の設定をすることで連携が強まった。これまで以上に教科担当の立場に立った情報発信や巻き込みを行っていくことで、より一層の協力関係を図りたい。

●専門教育の充実と魅力的な授業展開

＝担当授業のブラッシュアップ、学科会の活用、授業研究

介護福祉科では2022年度より導入したタブレット学習が定着し、タブレットを有効活用した授業が多く見られるようになった。保育科1年次科目「地域支援実践」を地域連携みらいキッズの運営準備に充てることで、早い段階から地域の子供たちと触れ合える実践的な授業にブラッシュアップした。

② 学校関係者評価委員会コメント

・行事を先生が表立って行うことはなく、学生が主役になる仕組みづくりがされていた。例えば、クラス全体がリーダーに付いていくように先生が選ばれたリーダーを立てるような声掛けをしてくれたり、場所を先生方が作ってくれたりしていた。また、それによって行事だけではなく、普段の学校生活においてクラス内の雰囲気がよくなかったときでも、学級委員などが進んで声掛けをし、改善策をクラス内で考えて発信したり、先生に提案したりしたことがあった。行事だけではなく、普段の生活の中でも学生がリーダーシップを発揮して取り組めるような仕組みや場所があるとより学生主体の学校運営ができるのではないかと。(櫻田委員：保育科について)

・介護福祉科は保育科と異なり主体的な学生があまり多くなく、積極的に頑張る学生に限られていた。行事では保育科に引っ張ってもらっている印象が強く、介護発表会では少し不安になるくらい先生の手を借りてしまっていた印象がある。しかし、少人数のグループだと役割が明確になることで、一人ひとりが動くことができていた。大人数だとやる人やらない人がどうしてもでてしまうので、少人数のグループで行うとよいのではないかと。

また、国家試験の結果が出ていない状況で卒業するため、卒業生アンケートを答える段階では自信を持って

「この学校で成長できた」を選ぶことを躊躇う学生もいると思う。それが介護福祉科のアンケート結果にも表れているのではないか。(佐々木委員：介護福祉科について)

3.評価項目の達成及び取組状況

(1)教育理念・目標

【評価項目】（評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1）	評価
学校の理念・目的・育成人材像は定められているか（専門分野の特性が明確になっているか）	4
社会経済のニーズ等を踏まえた学校の将来構想を抱いているか	3
学校の理念・目的・育成人材像・特色・将来構想などが生徒・保護者等に周知されているか	4
各学科の教育目標、育成人材像は、学科等に対応する業界のニーズに向けて方向づけられているか	3

① 課題

・社会経済のニーズ等の情報収集をする場が、主に年2回の教育課程編成委員会のみになっている。

② 今後の改善方策

・実習巡回や就職先の訪問等において、実習生・就職者のフォローだけでなく、社会経済のニーズ等の情報収集も目的に加え実施していく。

・普段の業務や生活の中で何気なく収集している社会経済のニーズ等を集約し、全体で共有する場を設ける。

③ 特記事項

特になし

④ 学校関係者評価委員会コメント

・日本語学校の非営利団体に所属して集会などに参加して情報収集を行っている。また、留学生についてのニュース発信をしている会社から発行されている留学生新聞をもらっており、運営メンバーで共有することで常に新しい情報を取り込めるようにしている。（平井委員：介護福祉科について）

(2)学校運営

【評価項目】（評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1）	評価
目的等に沿った運営方針が策定されているか	4
事業計画に沿った運営方針が策定されているか	3
運営組織や意思決定機能は、規則等において明確化されているか、有効に機能しているか	4
人事、給与に関する制度は整備されているか	4
教務・財務等の組織整備など意思決定システムは整備されているか	4
業界や地域社会等に対するコンプライアンス体制が整備されているか	4
教育活動に関する情報公開が適切になされているか	4
情報システム化等による業務の効率化が図られているか	3

① 課題

- ・事業活動に沿った運営方針として、教育活動に関する目標や課題、重点施策等は明確にしており、学校運営に関わる教職員には十分に周知できているが、学生に対しての周知は不十分な部分がある。
- ・情報システム化は進んでいるものの、業務の効率化についてはまだ課題が残る。効率的、効果的に業務を進めるためには情報システムを使いこなせる人材の育成が必要である。

② 今後の改善方策

- ・ホームルーム等で学生にも、本校の学生として目指してほしい到達点の共有をし、学生自身にも目標を意識した学校生活を送ってもらうようにする。
- ・業務を効率的、効果的に進められるよう、会議で強化点を共有したり、研修を行ったりするなどして人材育成に力を入れていく。

③ 特記事項

特になし

④ 学校関係者評価委員会コメント

- ・今日初めて学校のビジョンや理念をしっかりと図で見て知ったが、先生から教えてもらう内容や学校生活の中で熱意は非常に感じていたので、それと合致し、先生の思いが分かり納得した。学生の意識統一ができるよう、また、規律を守るような目標も盛り込み、学生にも目的を伝えていくとよいのではないかと。（佐々木委員：保育科・介護福祉科について）

(3)教育活動

【評価項目】（評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1）	評価
教育理念等に沿った教育課程の編成・実施方針等が策定されているか	4
目標の設定として、教育理念、育成人材像や業界のニーズを踏まえた教育機関としての修業年限に対応した教育到達レベルや学習時間の確保は明確にされているか	4
学科等のカリキュラムは体系的に編成されているか	4
キャリア教育・実践的な職業教育の視点に立ったカリキュラムや教育方法の工夫・開発などが実施されているか	4
関連分野の企業・関係施設等、業界団体等との連携により、カリキュラムの作成・見直し等が行われているか	3
関連分野における実践的な職業教育(産学連携によるインターンシップ、実技・実習等)が体系的に位置づけられているか	4
授業評価の実施・評価体制はあるか	4
職業に関する外部関係者からの評価を取り入れているか	4
成績評価・単位認定の基準は明確になっているか	4
資格(免許)取得の指導体制、カリキュラムの中での体系的な位置づけはあるか	4
人材育成目標に向け授業を行うことができる要件を備えた教員を確保し、組織できているか	4
関連分野における業界等との連携において優れた教員(本務・兼務含め)の提供先を確保するなどマネジメントが行われているか	4
関連分野における先端的な知識・技能等を修得するための研修や教員の指導力育成など資質向上のための取組が行われているか	4
職員の能力開発のための研修等が行われているか	4

① 課題

・時代の流れに応じてタブレット端末を使用しての授業が介護福祉科で行われているが、保育科を含めた学校全体への普及や使用方法などの確立が難しい。

② 今後の改善方策

・タブレット端末に限らず、授業内で現場の実情に即した ICT 教育を取り入れていく。

③ 特記事項

特になし

④ 学校関係者評価委員会コメント

・保育園の ICT 化は以前と比較し大変進んでいる。ぼけっとランドは全園が保育施設向けアプリの「コドモン」を使用した連絡帳のやりとりになった。園から保護者へのおたより発信や行事の出欠確認もコドモンから行うため、ペーパーレス化が進み、現場では紙に書くより、PC を使用しての作業の方が多い。実習では未だ書くことを求める作業が多いように見受けられるが、現場では PC を使用することが多いため現場との乖離があるのではな

いか。PC が苦手な新規職員は一人の連絡帳を入力するのに10～20分かかってしまい、昼休み中に作業を終えることができず、先輩職員もそのフォローに苦労しているような状況がある。学生時代に練習し、実務で苦労しないレベルまでできるようになっておくことが本人にとっても、就職先の園にとってもよいことであると考え。 (姉崎委員：保育科について)

・介護施設でも施設のICT導入にあたり行政から補助金があることもあり、デジタル化、ICT化が進んでいる。日々の食事量や排せつの時間などはタブレットから選択式で入力しており、モニタリングと呼ばれる月 1 回のプラン評価の業務はPCを使用して文章を入力している。業務量的にはPCと比較するとタブレットの使用頻度の方が高い状況である。その他、会議などの議事録はレコーディングして文字起こしされたものを記録するだけではなく、AI 議事録自動作成ツールを導入している。文書を作成するのが苦手な職員でも簡単にしっかりと文章を作成できるようになった。

テクノロジーの導入という面では、排泄のタイミングもおむつにつけたセンサーで知らせてもらうようになり、職員の手での交換回数が減って、業務効率化、生産性の向上につながっている。(松縄委員：介護福祉科について)

・今年の4月に保育士として現場に出たばかりだが、早速PCを使用してクラスだよりを作成している。その際、PCの操作に不慣れであるため苦戦しているという現状がある。1年生の授業でワード、エクセル、パワーポイントという各ソフトの基礎は学ぶが、卒業して現場に出るときには忘れていることも多い。2年生のときに実践で使うような応用レベルを学ぶことができれば、就職後すぐに実務で生かすことができると思う。

また、私が就職した園でも連絡帳での保護者とのやり取りはゴドモンを使用している。1日の様子を入力して配信するという業務があるが、文章を考えることが苦手だと午睡中の時間で作業を終えることが難しい。文章力や語彙力を伸ばすような内容や、時間内に保護者の方に読ませられるレベルの文章を書いたり、タイピング能力がつけるような内容を授業に盛り込むと就職後に困る場面も減るのではないかと。(櫻田委員：保育科について)

・私の就職した介護施設ではすこやかサンという介護記録アプリを使用している。PC入力作業があるのでタイピング能力は高いに越したことはない。介護福祉科では2年生の授業でワード、エクセル、パワーポイントの使用方法を習うが、各ソフトの基本操作等を掻い摘んで学ぶため、現場の実務に必要な資料やパワポを作成するレベルまでは到達できていない。例えば、通常授業をPC室で行ってPCでノートを取る時間を作ればタイピングの練習を行うことができるし、授業の内容を厚くし、現場で求められる力までつけ、自信を持って現場に出いけるような仕組みを作るのはどうか。(佐々木委員：介護福祉科について)

(4)学修成果

【評価項目】（評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1）	評価
就職率の向上が図られているか	4
資格(免許)取得率の向上が図られているか	4
退学率の低減が図られているか	3
卒業生・在校生の社会的な活躍及び評価を把握しているか	4
卒業後のキャリア形成への効果を把握し学校の教育活動の改善に活用されているか	4

① 課題

・目標を喪失し退学を申し出る生徒への有効的なアプローチ方法を模索している。

② 今後の改善方策

・入学後の目標喪失を防ぐために、入学前オリエンテーションなどで学校概要の詳細を説明しておく。

③ 特記事項

特になし

④ 学校関係者評価委員会コメント

・保育科に来るといことは子供が好きという気持ちがあるのだと思うのでその気持ちをいかに保てるかが重要ではないか。また、同じ建物内に保育園があるというメリットを生かし、実際に働いている保育士と話をする機会を作るのはどうか。身近にいる現役の保育士の話を聞くことで現場のリアルな話や、保育士として働くモデルケースを知ることができるので目標喪失の抑止に繋がると思う。(姉崎委員:保育科について)

・自分たちが行ったことに対して直接クライアントや利用者から感謝されるという仕事は決して多くはない。人の役に立つ喜びを実感できる仕事であることをよりアピールしていくことで目標喪失を防げるのではないか。また、介護という分野は、資格を取るだけではなく、自分の人生で生かせる技術や必要な考え方や、業種や職種が変わっても持ち運べるポータブルスキルを身に着けることができる。目標喪失をしてしまった学生に対して介護の仕事につかなくても生涯において生かせる学びであるということを伝え、目標を変えることで卒業まで学ぶことができるよう働きかけるのはどうか。

高齢化社会において、エッセンシャルワーカーのニーズは今後ますます高まる。行政の手なども積極的に入ってきているので、処遇も緩やかではあるが向上していく仕事である。そういった面でも介護を学んでおくことは利点の大きいことを伝えて退学防止、モチベーションの維持に繋げていくとよいのではないか。(松縄委員:介護福祉科について)

(5) 学生支援

【評価項目】（評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1）	評価
進路・就職に関する支援体制は整備されているか	3
学生相談に関する体制は整備されているか	4
学生の経済的側面に対する支援体制は整備されているか	4
学生の健康管理を担う組織体制はあるか	4
課外活動に対する支援体制は整備されているか	4
学生の生活環境への支援は行われているか	4
保護者と適切に連携しているか	4
卒業生への支援体制はあるか	3
中途退学者への支援体制はあるか	3
社会人のニーズを踏まえた教育環境が整備されているか	4
高校・高等専修学校等との連携によるキャリア教育・職業教育の取組が行われているか	4

① 課題

- ・能力的に難しい学生や、業界外の就職を目指す学生に対して早い段階でのサポートが必要。
- ・就職指導のスピード感が就職活動の開始時期と一致せず、就職に必要な業界理解に遅れが出た。（介護福祉科）
- ・就職後、早期離職してしまうケースが見られた。（保育科）

② 今後の改善方策

- ・自己分析を行い、強みを把握した上で自身に合う企業を見つけられるような支援を行う。
- ・就職活動の開始時期を意識できるよう、新年度当初より動機づけを行う。（介護福祉科）
- ・実習と就職担当者を統一し、エリア担当としてアプローチを行うために、面談などで関係性を構築する。（保育科）

③ 特記事項

特になし

④ 学校関係者評価委員会コメント

・就職先の選定については、いろんな園があるので、園について調べ、しっかりと自分に合った園を選ぶことが重要だと思う。早期離職してしまう学生はそのリサーチ不足や自分自身に合っているのかという深堀が足りていなかったことが原因の一つではないか。卒業生の就職先についてや、園について良い情報だけではない、リアルな情報が知ることができれば、自分に合った園を選ぶ判断材料になるのではないかと。

また、礼儀やマナーについての重要性を社会に出てから一層感じている。在学中から、相手に好印象を与えるにはどうすればよいかという部分もより力を入れて伝えていくとよいのではないかと。マナーをしっかりと教わることで、実習や就職活動も自信を持って行えると思う。（櫻田委員：保育科について）

・在学中、自分の感情のコントロールが苦手な学生もいたので、大人として、社会人としての振る舞いを早い時期に指導し、身に着けられるとよいのではないかと。先生が親しみやすく、優しく寄り添ってくれる学校というのは居心地よく、大切なことではあるが、自分の気持ちを押し通すことが必ずしも社会で通用するとは限らない。社会に出る前に感情を抑えるトレーニングをすることが社会に出てからの学生の為になると思う。(佐々木委員：介護福祉科について)

・日本語学校でも2日間のスタートアッププログラムを行っている。社会人として日本で働く上で大切なことなどを伝えているが、留学生生活開始直後であることもあり、入学当初の指導はすぐ忘れてしまう。様々な国からの留学生が同じクラスで学ぶため、文化の違いも多くあり、日本人同士なら起こらないような衝突も起こる。相手のことを考えて発言しようということや、相手を思いやるということをホームルームや行事の中で折に触れてたびたび伝え、指導を行っている。(平井委員：介護福祉科について)

・新規職員や、最近受け入れる実習生を見ていると、人の言葉や表現の裏側までを考えられない人が増えているように感じている。言葉をそのまま受け止めるだけになってしまい、言われたことをどうやって次に生かすのかを考えたり、相手が何を思ってその発言をしたのかなどを想像したりすることが苦手でコミュニケーション能力が低い印象である。受け入れ側としても、先輩職員としてどうやってその人の良さを引き出すかということや、どう伝えていくかが課題だと会議などでも度々話している。(竹田委員：保育科・介護福祉科について)

(6)教育環境

【評価項目】（評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1）	評価
施設・設備は、教育上の必要性に十分対応できるよう整備されているか	4
学内外の実習施設,インターンシップ,海外研修等について十分な教育体制を整備しているか	4
防災・安全管理に対する体制は整備されているか	3

① 課題

- ・施設・設備については、経年劣化により、修繕が必要な箇所が出てきている。
- ・昨年度より海外研修が計画されるなど、教育体制としては環境が整ってきたが、参加に繋げるのが難しい。
- ・専門単体での避難訓練は実施できたが、校舎全体での訓練は未実施。

② 今後の改善方策

- ・教育活動に支障が出る前に、計画的に修繕を進めていく。
- ・学生に貴重な体験を提供できるよう、周知方法を検討すると共に、海外研修及び各種体験の魅力や意義を伝えていく。
- ・校舎全体で、合同避難訓練を実施する。

③ 特記事項

特になし

③ 学校関係者評価委員会コメント

・ぼけっとランドは月に1回地震を想定した避難訓練を行っている。地震に伴って火災発生が発生したという想定を基、毎月出火場所を変え、毎回異なる避難経路を使用したり、園児を2班に分けるなどして避難場所である綾瀬小学校まで避難を行う。どのような状況やシフトの際に災害が起こるかわからないため、職員の係は固定せず、責任者不在でも指揮を執ることができるよう職員の訓練も併せて行っている。しかし、実際の災害時はぼけっとランドだけが避難することはなく、よりリアルな形での避難訓練を行うことが子どもたちにとっても理想である。そのため、校舎全体での合同の避難訓練はぼけっとランドとしても是非行いたい。(姉崎委員:保育科・介護福祉科について)

(7) 学生の受入れ募集

【評価項目】（評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1）	評価
学生募集活動は、適正に行われているか	4
学生募集活動において、教育成果は正確に伝えられているか	3
入学選考は、適性に行われているか	4
学納金は妥当なものとなっているか	4

① 課題

- ・コロナが明け、留学生の受け入れが大幅に増加したが、日本語能力が低い学生が多く、対応・受け入れが難しい学生が多数いた。また、学費の支払いが難しいなどの理由で、留学生の出願後辞退も多かった。
- ・例年よりも特待生入試の受験者が少なく、特待生の人数が減った。また、AO 特待生入試の再チャレンジ制度を利用する学生が1名のみだった為、入試後の案内を検討する必要がある。
- ・委託訓練生の確保に苦戦した。
- ・姉妹校飛鳥未来高校からの進学者数が伸びなかった。通信制高校から専門学校へのギャップを感じる学生もいる。

② 今後の改善方策

- ・入学希望者の日本語学校と連携し、入学前のフォローを実施する。（入試概要・入学条件・学費・求められる日本語能力の説明等）
- ・昨年度訪問をした日本語学校から進路ガイダンスのご案内を頂いたり、新入生の出身日本語学校から卒業式参加のご案内を頂いたりなど、少しずつ日本語学校との関係性が構築されてきている。今年度は引き続き学生募集と新入生フォローの観点から訪問を実施する。
- ・オープンキャンパス時の在校生スタッフの育成強化とあわせ、積極的に卒業生に参加してもらうことで、入学後の期待値を上げ、出願数の増加に繋げる。また、在校生・卒業生との交流を通し、繰り返し来校してもらうことで、入学前から愛校心を育て、特待生確保に繋げる。
- ・AO 特待生入試において、不合格者に対し再チャレンジ制度への促しを案内する。
- ・ハローワークへの訪問と合わせ、委託説明会後のフォローを本科生同様、丁寧に行う。
- ・在籍中の委託訓練生を確実に卒業・就職までサポートし、今後の委託生確保に繋げる。
- ・姉妹校である通信制高校については高校の授業に向いて学校の認知度を上げるとともに、専門学校の教員を知ってもらい、入学のハードルを下げる。入学前に姉妹校の卒業生を集めた懇談会を実施していく。

③ 特記事項

特になし

④ 学校関係者評価委員会コメント

- ・SANKO 日本語学校は三幸学園が運営しているということもあり、生徒ひとりひとりに対して手厚い日本語学校である。他の日本語学校全てが一人ひとりに手厚い対応ができるかという難しい部分もあると思われる。卒業生が毎年3～400人という学校では、進路担当者と学生の使用言語がマッチしておらず、意思疎通もままならないという現象が起きている。専門学校へ出願に当たって作文や母国にいる期間を含めた履歴書の

提出を求める専門学校もある中、三幸学園が運営している専門学校は出願の際に必要な書類は比較的少ない。それでも他の日本語学校や留学生によっては、出願書類を先生や友人が代筆している。出願書類を自分で作成させる、また、その書類をきれいに保管するように指導も行っているが、すべての日本語学校がここまでできるかという難しい。留学生全体の日本語力も下がっている中、オープンキャンパスで来校したときに出願の際に必要な事項だけ紙に書いて渡すなどするとよいのではないか。また、本人に伝えた内容をその場で自ら紙に書かせることは、理解度を図ることもできるため有効である。その場で書類作成を完結させることが最も重要である。(平井委員：介護福祉科について)

(8)財務

【評価項目】（評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1）	評価
中長期的に学校の財務基盤は安定しているといえるか	4
予算・収支計画は有効かつ妥当なものとなっているか	4
財務について会計監査が適正に行われているか	4
財務情報公開の体制整備はできているか	4

① 課題

【中長期計画】

なし

【予算・収支計画】

なし

【会計監査】

なし

【財務情報の公開】

なし

② 今後の改善方法

【中期計画】

・今期は第3次中期計画(2023 年度～2027 年度)の初年度であり、ホームページ上に公開している。今後は当該計画の達成状況等についても公開予定である。

【財務情報の公開】

なし

③ 特記事項

なし

④学校関係者評価委員会コメント

特になし

(9)法令等の遵守

【評価項目】（評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1）	評価
関係法令、専修学校設置基準等の遵守と適正な運営がなされているか	4
個人情報に関し、その保護のための対策がとられているか	4
自己評価の実施と問題点の改善に努めているか	4
自己評価結果を公開しているか	4

① 課題

特になし

② 今後の改善方策

特になし

③ 特記事項

特になし

④ 学校関係者評価委員会コメント

特になし

(10)社会貢献・地域貢献

【評価項目】（評価＝適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1）	評価
学校の教育資源や施設を活用した社会貢献・地域貢献を行っているか	4
生徒のボランティア活動を奨励、支援しているか	3
地域に対する公開講座・教育訓練（公共職業訓練等を含む）の受託等を積極的に実施しているか	4

① 課題

・ボランティアの案内はしたが参加者が少なかった。

② 今後の改善方策

・周知の仕方を改め余裕の持った発信をすることで参加者の増員を目指す。また、まずは同施設のぼけっとランド綾瀬と連携を強化していき気軽にボランティアをできる環境を整える。
 ・介護福祉科のボランティアについては、案内を早めいただけるよう介護実習の巡回時や電話にて依頼する。

③ 特記事項

・コロナ禍による規制や自粛が緩和され地域交流イベントへの参加者が増加しており学生の学びを深められた。（保育科）
 ・葛飾ろう学校との連携が6年ぶりに再開し学生同士の交流が深められた。（介護福祉科）

④ 学校関係者評価委員会コメント

・綾瀬は「あやセンターぐるぐる」というコミュニティ施設ができたばかりなので活用していくのはどうか。足立区も広いので校舎のある綾瀬近辺での知名度を上げ、近隣の園、施設、病院などと繋がっていくのが一番近道だと考える。福祉に限った話ではないが、資源を生かしていくことで、人が変わっても長く繋がりが続いていような仕組みづくりを目指すのがよい。区としては、人が来るフロアにチラシを置いたりすることは可能なので必要があればお声がけしてほしい。（大北委員：保育科・介護福祉科について）

・在学中、ボランティアの募集を見た際、運動会、お楽しみ会、ハロウィン等の行事やイベントに関するものだと興味湧いた。しかし、アルバイトをしている学生も多いので土日のボランティアには興味はあっても参加できない学生が多い。アルバイトをしている学生はアルバイト届を学校に提出しているので、アルバイトをしていない学生へ直接声をかけると効果的ではないか。アルバイトをしていない学生にとってボランティアで短期間、単発で保育に関わることはメリットがある。また、その後、クラスメイトがボランティアに参加したことを学生が知れば、興味を持つ学生は増えて参加率も上がるのではないかと。

園側として、土曜日のボランティア受け入れについては、土曜日は事務時間を取っている先生も多いので学生ボランティアの対応に人員を割かれると難色を示されるかもしれない。（櫻田委員：保育科について）

・当園でも学生のボランティアを受け入れているがあまりそのことをアピールしていなかったのもっと周知していきたい。ボランティアとして学生を受け入れ、先生ではない人と遊ぶことは園児も喜ぶ。土曜日のオープンキャンパスのボランティアなども前向きに検討したい。（竹田委員：保育科について）

・当園は小規模保育園であり、0～2歳児しか在園しておらず慣れていない大人が苦手な子どもも多くいるため、関わり方については事前に打ち合わせたい。保育に入らない形でのボランティアとしては、掲示物や壁面装飾の作成は非常にありがたい。保育士も残業時間の削減を進めているが、そこで最初に削られるのが壁面装飾等の作成である。そのため最近は掲示するものが減ったり、張り替える頻度が減ったりしてきている。手作りの装飾が充実すると保育士が助かるだけでなく、子どもたちが楽しんでくれる上、保護者からも喜ばれる。発達や季節に合ったものを制作することは、学生にとっても現場に出てから生かせるのではないか。また、それを園児へ直接渡すことで、関係も作れていくと思う。直接園児の反応を見ることはやりがいにもなり、園側からもフィードバックを行うことで学生の学びになる。(姉崎委員:保育科について)

・在学中、学んでいる内容を現場で実際どのように使われているのか興味があったが実習は在学中計5回しかないため、もっと様々な施設を見て学びたいと思っていた。コロナ禍でボランティアの受け入れが難しい期間ではあったと思うが、学校の近くの様々な施設にボランティアなどで行くことができればよい経験になったと思う。(佐々木委員:介護福祉科について)

(11)国際交流(必要に応じて)

【評価項目】(評価=適切:4、ほぼ適切:3、やや不適切:2、不適切:1)	評価
留学生の受入れ・派遣について戦略を持って国際交流を行っているか	3
受入れ・派遣、在席管理等において適切な手続き等がとられているか	4
学習成果が国内外で評価される取組を行っているか	3
学内で適切な体制が整備されているか	4

① 課題

- ・留学生のスポンサーに対する理解や認識が低く、紹介後に辞退が相次いだ。
- ・介護福祉科の留学生は、日本語能力が低い学生が多く、入学前後のフォローアップを強化する必要がある。

② 今後の改善方策

- ・入学希望の留学生に関しては日本語学校と情報共有し、スポンサーの制度についても理解してもらう。
- ・入学前はオープンキャンパスに複数回参加してもらい、入学後は日本語フォローの授業に必ず参加するよう指導する。

③ 特記事項

- ・昨年度と比較すると介護福祉科の留学生の入学者数が伸び、更に、キャリアデザイン総合科にも大学・大学院を受験希望の学生が多数入学した。

④ 学校関係者評価委員会コメント

・様々な国籍の人が入学してくると思うが、クラス内の出身国の偏りがあると、少数派の国籍者の疎外感や心細さにつながってしまう。また、教室内で母語で話をして盛り上がってしまい、クラスがまとまらないということが起こる可能性がある。日本語学校でもクラス内の出身国の偏りには気を付けている。

そして、日本語学校でも国籍関係なく、留学生の日本語力の低さは感じている。テクノロジーの発達で便利な機械が増え、日本にいながら日本語を使用しなくても生活できてしまう現状である。説明すると「わかった。」と答えるが、分かっていないことも多々ある。文字や言葉だけではなく、図や実物を用いて説明し、それを日本語で口に出して言わせることで定着できるよう働きかけている。(平井委員:介護福祉科について)

・実習先で指導してくれる方が外国の方だったり、就職先に外国の方が働いていたりするが、クラスメイトに留学生がいたことで現場でも驚きや戸惑いは少なく、スムーズに受け入れることができた。コミュニケーションを取るときも、何を伝えたいか汲み取って理解することができるので、同じクラスで留学生と一緒に学ぶことは日本人の学生にとってもメリットだと思う。(佐々木委員:介護福祉科について)

4. 学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

学校評価について、学校関係者評価委員からは概ね適切であるとの評価をいただいた。

地域に根差した、愛される保育、福祉の学校になるために委員の皆さまから積極的にご意見を頂いたので、まずは同施設にあるぽけっとランドとの連携を深め、業界連携、地域連携の足掛かりとしていきたい。

・同じ建物内にあるため、専門学校と保育園との交流を増やしたということは長らくアピールしていただいていた。昨年度から繋がりが増えているので今年度はより増やしていきたい。それによって相乗効果で園も学校もよりよくなっていくと思う。

また、昨年度は卒業生が当園に就職したが、その職員が入職当初、不安定になった時期に同じ建物内にあることで学生時代のことについて質問したり、相談したりできたことが大変ありがたかった。今後、当園だけではなく他の園でもそのように繋がることで卒業生にとっても園にとってもよい効果があるのではないかと。(姉崎委員：保育科について)

・ボランティアは学生のためにもなるが、受け入れ側としては園児が様々な人と関わることは成長していく中で必要なことだと思ったので、今後は積極的に受け入れていきたい。(竹田委員：保育科・介護福祉科について)

・働き手が不足している日本の現状において、サポートの充実している学校というのは介護・福祉の業界だけではなく世の中にとって非常にニーズがあると考えている。その中で卒業生を受け入れている我々業界と学校との連携はこれからますます重要になっている。また、学校で成長できたと思って卒業している学生が多いことに感銘を受けた。卒業生を受け入れるにあたって、学校で情熱を持って育ててもらった学生が入職してきていることを忘れずに接していきたい。(松縄委員：保育科・介護福祉科について)

・私が所属している課では就労支援の業務をメインに行っており、相談者を三段階に分けている。働きたいけど働けないという人、人とコミュニケーションを取ることに困難な人、根本的な生活リズムが整っておらずすぐには就労できない人の3つで、訪れる人は全員状況が異なる。みんな異なる状況で訪れてくるという点では学校も同じではないか。それを一斉にスタートさせ、育て、卒業させることは簡単ではない。当課では、就業後のフォローを定期的、継続的に行っている。気にかけてくれる人がいるということは就職したての人にとって精神的な支えになるため今度も続けていってほしい。

また、挨拶運動は足立区でも役職者と1年目の職員が始業前の時間に庁舎前で行っている。毎日それをコラムに書いて全庁共有するほど区でも重要視している部分である。学校の目標にも掲げられているように重要なことだと感じているので、今後も大切にしていってほしい。(大北委員：保育科・介護福祉科について)

・オープンキャンパスに行っただけで終わったり、申し込んだのにオープンキャンパス行かなかったりという留学生がいる。オープンキャンパスがどのようなものなのか理解しないままに申し込む留学生もいる。最近は留学生間のうわさやSNS上の情報で介護分野はお金がかからずに学ぶことができる、ビザが必ずもらえるなどの正確ではない情報だけを鵜呑みにして行ってしまったりしている。当校でもアンケートを取ったところ、介護を希望している留学生の割合は非常に高かった。介護の仕事についてしっかりと説明し、理解をしてもらってから送り出していく必要があると思う(平井委員：介護福祉科について)